

古代ローマの宗教

小堀 馨子

古代ローマ世界全般に関しては教材研究に適した学術書も一般書も充実しているが、宗教についてはまとまった著作が少なく、なかなか教えるにいい現状がある。古代ローマ人の文化遺産はラテン語やローマ法などの無形のもの水道橋や円形劇場などの有形のものが多数存在し、近代ヨーロッパを通じ現代の世界各地の文明にまで多大な影響を与えた。しかし、古代ローマ人の宗教に関する研究は未だに日本においては十分とはいえない。

しかしそのなかでも、キース・ホプキンス著、小堀馨子・中西恭子・本村凌二訳『神々にあふれる世界——古代ローマ宗教史探訪』(上・下、岩波書店、二〇〇三)は、紀元後一世紀から四世紀の間、それぞれの時代と地域でローマ人がどのような多様な宗教的側面を呈していたかを全八章で説明しており、帝政期のローマに存在した諸宗教の全体像を得るのに適した著作である。同書に続く本村凌二『多神教と一神教——古代地中海世界の宗教ドラマ』(岩波新書、岩波書店、二〇〇五)はローマに流入した諸宗教とそれに対するローマ人の応答に焦点を当

て、ホプキンスの著作の真髓を簡潔に紹介している。ただし難点は、ローマ人が共和政期以来おこなってきた儀礼を中心に据えた伝統的宗教に関する叙述が少ないことであろう。これに対し、ローマ人が儀礼・祭祀を中心とする宗教行為を實踐するにいたった心性に対する解明を試みたのがカール・ケレーニイ著、高橋英夫訳『神話と古代宗教』(ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇〇)である。ローマ人にとつての宗教は、近現代のように社会のなかで独立に存在する一つの領域におさまるものではなく、ローマ人のあらゆる思考や行動様式に密接に埋め込まれているという本書の主張は、研究上で大いなる意義を有している。またフステル・ド・クラランジュ著、田辺貞之助訳『古代都市——ギリシア・ローマに於ける宗教・法律・制度の研究』(白水社、一九九五)の原著は一八六四年に刊行されているが、ローマ人にとつて宗教が法律や国家体制といかに密接不可分であったかを示し、宗教を政治や法律と切り離す政教分離の原則で考えがちな現代人の思考の限界を再認させる。

古代ローマの宗教研究に関してはジュールジュ・デュメジルを忘れるわけにはいかない。彼の古代ローマ宗教に関するもつとも重要な著作、*La religion romaine archaïque*、1974は本邦未訳であるが、日本語でも川角信夫・神野公男・山根重男訳『ローマの誕生』(丸山静・前田耕作編『デュメジル・コレクション』

ン3』所収、ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇一)および大橋寿美子訳『ローマの祭——夏と秋』(法政大学出版局、一九九四)などの翻訳をもつて彼の研究が紹介されている。とくに後者においてデュメジルは印欧比較神話学の立場からローマの宗教の構造的な理解を試みており、後述するオウイデウス『祭暦』では記述を欠く七月から十二月までのローマの祭日に関する研究は、祭礼からローマ宗教を理解するうえで必読である。なお、ギリシア神話からローマに神々が輸入されたというのが通説になっているが、ローマ独自の神話も歴史叙述というかたちを借りて後世に残されている点に関しては松田治『ローマ神話の発生——ロムルスとレムスの物語』(現代教養文庫、社会思想社、一九九二)に詳しい。

ここで、古代ローマの宗教について語る古代ローマ人の著作を邦訳のあるものの中から紹介しておきたい。まずローマの祭りについて筆頭にあげられるのが前述のオウイデウス『祭暦』(高橋宏幸訳、国文社、一九九四)である。これは一月から六月までのローマの祭礼を詩のかたちで叙述している。同じくオウイデウス『変身物語』(上・下、中村善也訳、岩波文庫、岩波書店、一九八四)はギリシアの神話を語り直しながら、ローマの英雄へと繋げている。詩という語り口の裏に隠れた主題である、ギリシアの神々がローマ人に受容されながらローマ

の建国の祖の物語へと繋げられていく、という系譜をよく理解できる作品である。一方、キケロ『法律について』(第二巻、岡道男訳『キケロ選集 哲学I』所収、岩波書店、一九九四)はローマ人の宗教に関する法律を扱っている。またキケロ『神々の本性について』(山下太郎・五之治昌比呂訳『キケロ選集I——哲学IV』所収、岩波書店、二〇〇〇)はローマ人が神々という存在をどのように考えているかを示す点で重要な作品である。

ローマ帝国を築き上げた人々には前段で述べた市民階級もいたが、帝国の版図の拡大によりさまざまな地域に住む人々がローマ市民あるいは自由人として帝国の一員に組み込まれ、その宗教もローマ帝国の文化のなかに持ち込まれた。そのような「外来宗教」に焦点を当てたのは小川英雄による一連の訳書で、その一大勢力となったミトラス教についてはフランツ・キュモン『ミトラの密儀』(平凡社、一九九三)やM・J・フェルマースレン『ミトラス教』(山本書店、一九九三)で扱った。同じくキュモン『古代ローマの来世観』(平凡社、一九九六)は東方(オリエント世界)から流入した諸宗教がローマ人の来世観に変化をもたらした様相を描いており、ローマ社会が時代の変遷とともにダイナミックに動いていた様相を捉えていて意義深い。小川が自身の研究をまとめたものには『ローマ帝国の

神々——光はオリエントより」（中公新書、中央公論新社、二〇〇三）がある。

一方、大貫隆『グノーシス考』（岩波書店、二〇〇〇）や同訳・著『グノーシスの神話』（講談社学術文庫、講談社、二〇一四）は、ローマ帝政期にユダヤ教とギリシア哲学の影響下で生じたキリスト教の異端とされるグノーシス主義の研究であり、ローマ帝国の諸宗教の多様性を理解するうえで押さえておくべき書物である。グノーシスに関する一次史料としては、荒井献・大貫隆・小林稔・筒井賢治訳『ナグ・ハマディ文書』（全四巻、岩波書店、一九九七・九八）をあげたい。エジプトのイシス信仰に関するまとまった研究書はまだないが、古代作家の作品としてはプタルコス『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』（柳沼重剛訳、岩波文庫、岩波書店、一九九六）がある。

さて、世界史学習の視点からローマ帝国の宗教を考えると「ローマ帝国とキリスト教」は避けて通れない主題である。近現代ヨーロッパ文明の基盤となる二つの要素、ローマの文物とキリスト教が出会ったのが帝政期のローマである。両者の関係に関する草分け的な研究書としては、やや古いが弓削達『ローマ帝国とキリスト教』（河出文庫、河出書房新社、一九八九（原著・一九六八））をあげておきたい。この分野に関しては日本

期のキリスト教徒迫害について帝国側と教会側の双方の資料を丹念に突き合わせ、帝国の統治原理と法運営のあり方に焦点を当てて吟味し、ここから三世紀の迫害を再検討したのが、保坂高殿の『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教徒迫害』（教文館、二〇〇三）と『ローマ帝政中期の国家と教会——キリスト教徒迫害史研究一九三—三二一年』（教文館、二〇〇八）である。

このようにキリスト教徒迫害を中心に据えたローマ帝政期の宗教研究にも問題が無いわけではない。近年の欧米では、西暦四七六年の西ローマ帝国滅亡をもって地中海世界における「古代」が終焉するという従来の歴史観に対して、文化史・思想史・宗教史の立場から「古代末期」という新しい時代区分が提唱されている。それによれば、ギリシア・ローマ世界で「古代」と呼べる時代は早くとも二世紀中葉、遅くとも三世紀初頭には変化しはじめ、七世紀のイスラーム教徒による地中海南岸地域の支配までの数世紀には以前とは異なる心性を示す「古代末期」ともいうべき時代が存在したのである。その例として、ピーター・ブラウン著、宮島直機訳『古代末期の世界——ローマ帝国はなぜキリスト教化したか？』（刀水書房、二〇〇六）、と同著、足立広明訳『古代末期の形成』（慶應義塾大学出版会、二〇〇六）をあげ、この読書案内を締めくくりたい。

（こぼり けいこ／帝京科学大学総合教育センター准教授）

人研究者の数も多い。松本宣郎『ガリラヤからローマへ——地中海世界をかえたキリスト教徒』（山川出版社、一九九四）は属州ユダヤの辺境ガリラヤ地方で誕生した運動が三百年後にはローマ帝国の国教となるまでを、その内容は革命的としても古代地中海文化とその社会という基盤を抜きでは考えられないという視点から描き出す。同様の視点に立つ海外の研究書の邦訳としてはS・ベンコ編著、新田一郎訳『原始キリスト教の背景としてのローマ帝国』（教文館、一九八九）をあげる。帝国内の辺境で発生した初期キリスト教の集団が帝政初期のローマで成長していく過程を、当時のローマ帝国の法律・経済・哲学・教育・ユダヤ教・迫害との関連で多角的に捉えた同書の複数著者による共同研究は現在でも有効である。

なかでも「キリスト教徒迫害」の主題は、近現代の欧米諸国における社会思潮を反映したさまざまな解釈から何度も描かれ直されて受容されたという歴史的経緯を持つがゆえに、学術研究の立場からその実像を探求して提示する必要がある。前掲の一連の著作でもこのテーマは重要視されていたが、とくに紀元三世紀にキリスト教徒迫害がそれまでの局地的小規模の事象から帝国全土での組織的実行に変化した理由を丹念に考察したのが、豊田浩志『キリスト教の興隆とローマ帝国』（南窓社、一九九四）である。それに対し、紀元二世紀中葉までの帝政初

みるみる論述力がつく 世界史

黒河潤二・山岡晃・湯川晴雄=編

B5判 200頁 解答例40頁
本体1000円(税別) ISBN 978-4-634-03084-8

合格答案へのプロセスを丁寧に解説し、短期間で論述力を向上させる。200字以内の小論述25題からなる「基本編」、600字以内の大論述15題からなる「発展編」の2部構成。2色刷。

